

さあ、まだ見ぬ壁が待っている。

～障害者クライミング普及 20 年、歩み続ける先に描くインクルーシブな社会～

小 林 幸一郎 (NPO 法人モンキーマジック代表理事)

## はじめに

人生の失望と希望の傍らには、いつもクライミングがあった。若かりし日の私の居場所となったこのスポーツは、失明宣告という絶望の淵にあっても、再び前を向く力を与えてくれた。障害者クライミング普及を行う NPO 法人モンキーマジックを設立して 20 年。私たちが今、注力しているのは単なる「クライミングを障害者に普及する」ことに留まらない。それは、障害の有無にかかわらず、クライミングを通じて交流し混ざり合う場を創ることである。本稿では、ここまでの歩みを振り返るとともに、クライミングという営みが拓くインクルーシブな社会の可能性と、その未来への展望を綴る。

## 第 1 章：クライミングは失望の日々にも、希望の日々にも、いつもすぐそこに在り続けた

小学校の頃から一番嫌いだった科目は体育であった。中学でも運動も勉強もできない私は、劣等感のかたまりのような子どもだった。「あなたの夢は何ですか」という大人からの問いかけには、適当に相手が喜びそうなことを返してその場をやり過ごしていた。やりたいことも夢もない子どもだった。しかし高校に上がり、たまたま本屋で立ち読みした雑誌「山と溪谷」のフリークライミング紹介特集に目が留まった。美しい岩を登る外国人の写真とともに、そこには「多くのスポーツが、誰が速いか、強いかを競うなかで、このスポーツは個々人の限界を押し上げてゆくものだ」と書かれていた。「誰かと比べ

られないんだ、これなら自分にも楽しめるかもしれない」16 歳高校 2 年生の夏、私は通気を出して雑誌に紹介されていた長野県川上村・小川山でのスクールの門を叩いた。当時はまだ日本にクライミングジムはなく、クライミングは岩場で始めるものであった。たまたま入ったのはトップクライマー池田功氏のスクールであった。そこに集う大人たちも多様で、一人だけ高校生である自分にとっては刺激ばかりであった。これが、私にとって初めて夢中になれた「クライミング」との出会いだった。そこには、達成感を得られるスポーツとしての魅力と、そのコミュニティが持つ居場所感の魅力があり私を強く魅きつけた。大学 3 年生のヨセミテを皮切りに海外の岩場にも出向き、社会人となってからもクライミングは生活の彩りに欠かせないものとなっていた。

異変は 28 歳のある日であった。車を運転していて見えづらさを感じ、生まれて初めて出向いた眼鏡屋で眼科受診を勧められた。そして、医師から告げられたのは網膜の進行性難病だった。治療方法はなく、私は近い将来の失明を宣告された。「一体、次は、何ができなくなるのか」視力の低下を実感する中で、起きてもない悪い未来のことばかりと向き合う日々がやってきた。生きることの前でクライミングなど所詮趣味でしかなく、それを続けるかなど、この時の自分にとってはどうでもいい話であった。

そんなある日、友人の結婚式に出席するため米国を訪ねた私は、全盲で七大陸最高峰登頂者がいることを知り、ショックを受ける。視覚障害者には、自

分が思ってきたよりはるかに大きな可能性があるのではないか、そんな非常にポジティブなショックだった。その人物、エリック・ワイエンマイヤー氏に会ってみたいとホームページを見つけ連絡を取り、再び渡米した。そこで彼は、「アメリカではたくさんの障害者が、クライミングという『できない』とっていた経験から、失いかけていた自信を取り戻したり、新しい可能性に気づいたりできている」と話してくれた。私は、細々と辞めずにジムで続けたクライミングの可能性に気づかされた。「クライミングの魅力や価値を知る自分こそ、日本で障害者にそれを伝えることができるのではないか。それをやるのが、私という一人の人間としての価値ではないか」自らの原体験、そして失意の日々の中からのロールモデルとの出会いを経て、2005年、37歳の夏、視覚障害者向けクライミングスクールを運営するNPO法人モンキーマジックを設立するに至ったのである。



キリマンジャロ初登頂の小林とエリック・ヴァイエンマイヤー

## 第2章：障害者クライミング普及の先にある価値を見て歩みはじめ、歩み続ける

2005年に設立されたNPO法人モンキーマジックは、以下のビジョン、ミッション、バリューを掲げ活動を続けてきた。一貫して、それまで日本に存在しなかった障害者クライミング普及活動を推し進め

ることとが私たちの使命であった。

### ・ビジョン／私たちの目指す社会

障害者クライミング普及活動を通じて、多様性を認め合えるインクルーシブな社会を実現し、より成熟した豊かな社会を創ります。

### ・ミッション／私たちの使命・目的

モンキーマジックは、「見えない壁だって、越えられる。」をコンセプトに、フリークライミングを通じて、視覚障害者をはじめとするすべての人々の可能性を大きく広げることを目的とし、活動しているNPO法人です。

### ・バリュー／私たちの届ける価値

クライミングを通じ、自分の成長を実感できる体験を届けます。

設立当初は自らの原体験に基づき、岩場での視覚障害者向けスクール開催を重ねていた。障害者がこのスポーツに打ち込むことは、生涯スポーツとしての幅を広げるだけでなく、自立支援や社会参画、ひいてはQOL（生活の質）の向上に直結する。私自身がそれを実感しており、確信を持って動き出した。

家族経営のような形で走り出したNPO法人は、アウトドアブランド各社へ支援を募り、ボランティ



学会にて質問に答える小林

アとして活動を支えてくれる仲間を探した。しかし、参加者を募るために眼科医や盲学校、施設などを回っても、「クライミングなんていう危険なスポーツに障害者を紹介できない」という拒絶に近い反応に苦しむ日々が続いた。だが、その価値に絶対の自信があった私は、まずは周囲の理解が必要なのだと、専門家が集まる学会での発表などを試みるようになった。次第に理解者も現れ、参加者も出始めた。現場を支えてくれるボランティア仲間との出会い、およびTHE NORTH FACEによるチャリティTシャツを通じた支援など、小さな規模ながら活動を継続できる下地が少しずつ整い始めていったのである。

### 第3章：他者との比較ではなく、内なる自分との対話

クライミングというスポーツの最大の特徴は、それが「他者との比較」ではなく、常に「自分自身との対話」である点にあると私は考えている。目の前の壁にある課題をどうすれば完登できるのか。どの手順で、どう身体を使うのか。離陸した瞬間から登ること以外考えられない「無の境地」。そこには、障害の有無、年齢、経験の差などは一切関係ない。一人のクライマーとして等しく壁と向き合う「個の挑戦」が存在するだけである。

例えば視覚障害者は、仲間の「2時、遠めに小さ



アウトドアスクール開始当初の様子

なカチがある」といった言葉のガイドを頼りに登る。一見するとその声に導かれているようだが、実態は異なる。次のホールドがどこにあるのかという視覚情報を補ってもらうことで、自らをコントロールし、持てる力を最大限に引き出してルートを自らの意志で攻略しているのである。片脚のクライマーも、車いすユーザーも、麻痺により可動域に制限がある人も、それぞれが自らの身体的特徴を最大限に活かし、独自の正解を見出していく。その「自らの可能性を限界まで引き出す」という点において、障害者を含むすべてのクライマーの姿は、人として等しい。これこそが、すべての人がありのままの自分と向き合い、内なる力を引き出している姿に他ならない。クライミングは、誰にでもその人が持つ可能性を最大限に輝かせる舞台を提供してくれるのである。

また「自らの力で高いところへ登る」というルールは極めてシンプルである。この「登りたい!」「あそこに到達したい!」という本能や欲求は、障害、年齢、性別、国籍、文化といったあらゆる境界を越え、人を平等に熱狂させる。誰かが完登すればその場にいる全員が拍手を送り、惜しくもフォールすれば共に悔しがる。グレードに関わらず誰もが同じ感情を共有できる空間では、障害さえも「登り方の特徴のひとつ」に過ぎないと感じられる。このインクルーシブな関係性こそが、クライミングが持つ普遍的な価値であると感じてきた。そしてこれこそが、私がモンキーマジックの活動を通じて20年間信じ続けてきた「クライミングというスポーツの力」の源泉なのである。

### 第4章：金メダルの輝きは、多様な社会を妥らす光に

「パラクライミングという障害者のクライミング競技大会がロシアで開催されるから、出ませんか」2006年、この史上初のパラクライミング国際大会

への誘いが日本山岳協会（現・日本山岳・スポーツクライミング協会）から届いた。そこで視覚障害男子カテゴリで金メダルを獲得し、その後2014年から2019年にかけては世界選手権で男子B1クラス4連覇という、身に余る成績を上げることができた。鈴木直也氏という素晴らしいサイトガイドのパートナーに恵まれたからこそその結果である。子どもの頃、あれほどスポーツが苦手だった私が、視覚障害者となったことで日の丸を背負い、表彰台の一番上で君が代を斉唱する。その経験は、私に計り知れない成長と自信を与えてくれた。

「楽しんできて！」大会へ送り出してくれる仲間の言葉に、「がんばれるけれど、楽しむ余裕なんてとても持てない」——大会を重ねるほどに、日の丸のユニフォームの重さを痛感し、心の中でそう呟いていた。それほどまでに大会当日に照準を合わせ、心と身体を研ぎ澄ませて過ごした日々は、私にとって何物にも代えがたい研鑽の日々だった。

しかし振り返れば、私がこれほどまでに競技の世界を追い求めたのは、単に自分個人の結果を欲したからではなく、クライミングそのものの可能性と選択肢を実感できていたからに他ならなかった。国際大会への参戦が始まったのは、NPO法人モンキーマジックを設立した翌年のことである。以来、競技者として、また国内大会の運営者として歩んできた日々は、そのままパラクライミングという障害者クライミング発展の日々と重なり、2020年には日本パラクライミング協会の共同代表という責務も仰せつかることとなった。

常に健常者のクライミング競技である「スポーツクライミング」の背中を追い、時には同じ金メダルであっても世間が向ける視線の質の違いに、その社会的価値を問い直す日々でもあった。しかし、アスリートとしての経験と誇りを胸に、現実と向き合い

ながらパラクライミングの価値を少しでも高め、後進により善き思いを届けたい、と走り続けてきた自負がある。その積み重ねかなければ、障害者クライミングという文化がここまで広く社会に受け入れられることはなかっただろうと信じている。

パラクライミングという競技が経験させてくれたのは、大会当日に向けて誇りを持ち、心身の能力を最大限に磨き上げる「研鑽」の価値である。そして私が今、改めて目指すのは、クライミングを通じて障害の有無という境界を越えてゆく「寛容さ」の追求である。障害者がスポーツをすることは、しばしば克服や挑戦といった「リハビリ」や「感動の物語」として消費されがちである。しかし、私たちが壁に向き合う本質的な価値は、それを見る人々の障害に対する既成概念を揺さぶり、無意識に引かれた境界線を溶かしていくプロセスにこそある。同じクライマーという立ち位置には、本来「見えない壁」など存在しないはずなのだ。

2028年ロサンゼルス・パラリンピックでの追加競技決定の報を聞き、私がこの競技に出会った頃には想像もできなかったほど多くの人々が、障害者が壁を登る姿を通じて、人類の可能性を追求する様子を目の当たりにすることになるだろう。クライミングがパラリンピックの種目となることで、その本質的な力や可能性がより広く社会に伝わると信じている。



世界大会の舞台で金メダルを獲得

私は大会の晴れ舞台やメダルの輝きを、単なる優劣の証としてではなく、多様な個性が混ざり合う「未来の社会のあり方」を示す光として捉えている。これこそが、パラクライミング黎明期から関わり、アスリートとして、およびNPO代表として、私が一貫して見つめてきた景色である。

## 第5章：歩み続けた先に、交流が生み出す「あるべき社会の縮図」

「ロープに結ばれることで、自由に解き放たれる」——これは、NPO 法人モンキーマジック設立当初、岩場でのスクールで指導にあたっていた方が語ってくれた言葉である。視覚障害のあるクライマーにとって、岩場までのアプローチは決して容易ではない。時間をかけ、時に手足を駆使して険しい道を進み、ようやく岩壁にたどり着く。しかし、一度ハーネスを装着し、ロープを結んで登り始めれば、そこは安全が担保された空間へと変わる。それまで慎重だった動きは、ダイナミックで自由な「舞」へと変貌を遂げる。世間からは「危険で壮大な冒険」と見られがちなかクライミングが、実は視覚障害者にこそ大きな自由と可能性をもたらす。衝はその瞬間を何度も目の当たりにしてきた。

そんな中、自然の岩場で経験を積んだ視覚障害のある参加者から、ある切実な相談を受けた。クライ

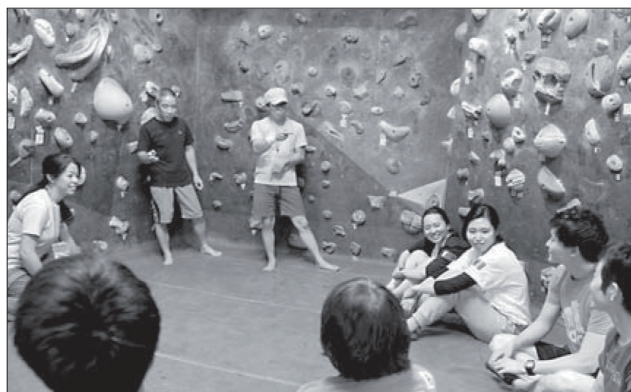
ミングは素晴らしい。けれど、私たちが登るためには、モンキーマジックのスクールに参加し続けるしかないのでしょうか——この問いがきっかけとなり、2012年春、新たな試みが始まった。障害の有無にかかわらず、クライミングという共通の趣味を持つ者同士が出会える仲間づくりのマッチングイベントの立ち上げである。

「マンデーマジック」と名付けたこのイベントは、月曜夜に定休日の都内クライミングジムを借り受け、仕事帰りに誰でも気軽に立ち寄れる場として開始した。当初は集客に苦心したが、参加者は少しずつ増え始め、そこで私たちは想定していなかった2つの大きな反響と出会うこととなる。

一つ目は、視覚障害の人だけではなく、聴覚障害、片腕の麻痺など様々な障害のある人たちが参加し、共にクライミングを楽しんでくれたことだ。途中で聴力を失った男性は、「聴こえなくてもガイドができる!」と言い、私は伝えたいことを紙に書いたり、携帯を使ったりとお互いに分かり合う工夫を楽しんだ。障害が違えども、途中で障害を負ったことで諦めたことや得られたことを分かち合える時間は、インクルーシブを私自身が経験する始まりとなり、異なる障害者、程度の異なる障害者、そんな同士の理解促進が育まれたこと。

二つ目は、障害のないクライマーたちも想像以上に楽しみ、深く関わってくれたことだ。彼らは障害者と共に登り、達成感を共有する経験を通じて、障害者を「助けなければならない人たち」ではなく、共に楽しむ「仲間」として捉えるようになったと語ってくれた。この経験が、彼らの中にあった固定観念を、理屈ではなく実感として書き換えていったのである。

「同じ課題に挑み、達成感を分かち合う」——そこには、多様性がごく自然に溶け込んだ「あるべき



マンデーマジック高田馬場スタート当時の様子

社会の縮図」があった。クライミングは、障害者の運動機会やQOLを向上させるだけにとどまらない。インクルーシブな社会の本質を、誰もが実感できる場所を提供してくれるのだ。障害者のクライミングスクールから始まった活動は、対象を広げることで社会的な認知も高まっていった。「交流が生み出すクライミングの大きな可能性」に気づかされた私たちは、この交流型イベントを活動の基幹事業へと据え、今日まで歩みを続けている。

## 第6章：自発的な行動を導く、ともに登る真の体験

マンデーマジックから始まった交流型クライミングイベントは「障害者のためのイベント」ではない。障害の有無にかかわらずすべての人を対象としている。参加者の約6割は障害のない方々であるが、残りは主に視覚障害のある参加者が多く集まっている。近年、クライミングはメディア露出も増え、アーバンスポーツとして認知度は設立当初と比べものにならないほど高まった。室内施設で開催することで未経験の方にとっても敷居が下がり、障害の有無を問わず申し込みが増えている。

こうした未経験の方には「初めて講習会」を、初参加の方全員には「H.K.K. 講習会」を受けていただく。H.K.K. とは、理事の鈴木直也氏が考案した



初めて来た方は必ず受講するHKK講習会

「方向 (Houkou)」 「距離 (Kyoru)」 「形 Katachi」 の頭文字をとったものである。「左手から2時、遠く、右下がりのサツマイモ」。このように、最後に触れたホールドを時計の文字盤の中心見立てて伝えることで、視覚障害者は次のホールドの位置を思い描き、頭の中にルートをイメージできるようになる。

ここで大切にしているのは、「伝えてほしい、でも教えないでほしい」ということだ。初めて参加する方の多くは、「自分が障害者を登らせてあげなければ!」という優しさから、つい手順 (ムーブ) まで教えてしまいがちである。しかし、これでは視覚障害者は指示する人の「操り人形」になってしまう。私たちが伝えてほしいのは、あくまで「見えないから分からない、次のホールドの位置」である。的確に情報を伝えさえすれば、あとの主体性は登るクライマー本人に委ねられる。「もう少し右上だよ!」という一瞬のやり取りの中に生まれるのは、上下関係ではなく、共通のゴールを目指す「対等な仲間」としての関係だ。良かれと思った「過剰な手助け」が、時に相手の可能性を塞いでしまうこともある。クライミングはそんな大切な気づきを与えてくれる。「一人の人間が自らの課題に向き合い、達成を目指すプロセスから見てくる可能性の拡大と、そこにおける他者の適切な関わり」——これこそが、インクルーシブな社会構築の核ではないだろうか。

この「混ざり合い」の体験は、ジムを一步出た後の日常を確実に変えていく。街で白杖を持つ人を見かけたとき、以前なら躊躇していた人が自然に声をかけられるようになる。クライミングという共通言語を介して生まれた小さな成功体験が、心の壁を溶かし、社会を静かに作り変えていくのである。

## 第7章：点から面へ、地域に育んでほしい「種」

2025年11月、マンデーマジックは第150回という節

目を迎えた。この一つの「点」から始まった交流型イベントは、今、日本全国へと広がる「面」の動きへと進化している。私たちが目指しているのは拠点の数ではなく、それぞれの地域に、その土地ならではの「インクルーシブなコミュニティ」が自立的に育っていくことである。

2014年、仲間が札幌で「えぞモンキー」を立ち上げたことを機に、大阪、名古屋、福岡など各地へと届ける活動に注力した。試行錯誤を繰り返し、現在では全国21都道府県、24拠点到まで地域は広がった。2024年には全国で151回開催、1464名の参加（うち障害者618名）の実績を数えた。各地域の運営は現地の有志や団体が主宰し、以下のコンセプトを共通のポイントとして掲げている。

1. 地域の人々が主宰して定期的に開催する、地域に根ざしたイベントであること。
2. 障害の有無や年齢・性別・国籍に関係なく、全員が同じ一参加者であること。
3. 新しい人と人がつながり、多様性を認め合い、仲間になれる場所であること。

継続の最大の試練はコロナ禍であった。活動休止を余儀なくされ、離散したコミュニティを再建する



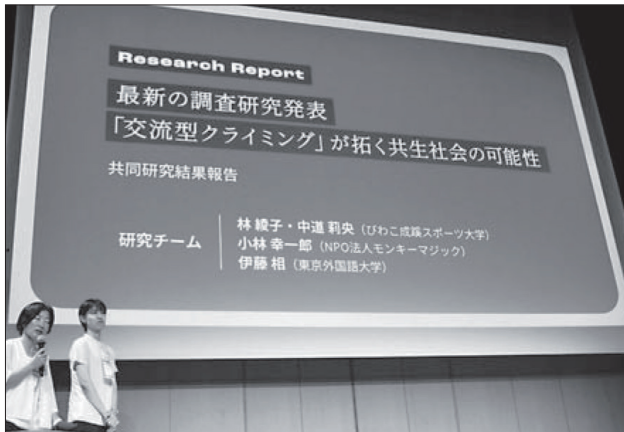
北海道・札幌地域密着の交流イベント「えぞモンキー」は2023年に第100回を達成

のは容易ではなかった。それでも各地の自走にこだわり続ける理由は、東京のモンキーマジックの「イベント」ではなく、「その街の仲間による主宰」でなければ生まれない価値があるからだ。地元のメンバーが主宰し、地元のジムを拠点とすれば、そこには日常的な交流の土壌が育つ。街で出会ったときに「またジムでね」と声を掛け合える「顔の見える関係性」が地域の中に編み込まれていくことこそが、社会を創る真の力になると信じている。ノウハウはいわば「種」である。それを各地に届け、その土地の風土に合った形で根付かせていく。地域に暮らす多様な人々が関わる中で、種は形を変えながら広がっている。一つひとつの拠点を再び繋ぎ直し、地域主体で自走できるまで支え続ける。その積み重ねが、やがて世界を「誰もが自分らしくいられる場所」で満たしていく面へと広がると確信している。

## 第8章：科学が解き明かす「交流型クライミング」の客観的価値

20周年という大きな節目を迎えるにあたり、私たちは一つの重要な課題に取り組んだ。それは、これまで現場で確信してきた「交流型クライミングの力」を、個人の経験談に留めず、学術的に評価し直すことである。現在、びわこ成蹊スポーツ大学の林綾子先生、中道莉央先生、それぞれのご専門分野での共同研究が進められており、交流型クライミングが持つ独自の意義が明らかになりつつある。

1. 統計が示す「バリアレス」な心理的効果（量的研究：林綾子教授）林先生は、2024－25年に実施したアンケート調査（回答数223名、うち有効回答数210名）を統計学的に分析した。特筆すべきは、「性別や年代、参加形態、障害の有無などの属性によるデータの差があまり見られない」という点である。



量的・質的研究を行うびわこ成蹊大学の林先生と中道先生

一般的な研究では、属性、特に障害者と健常者の間には自己効力感や社会参画意識に一定の差が生じがちであるが、本研究結果は両者が共に、クライミングの魅力を味わい、交流型クライミングに居場所を感じ、その経験を通じて生きづらさが軽減し、障害への認識が変化したことを示した。数値が共に高く、同様のポジティブな変化を示していたことは、プログラムそのものが全員を対等な「一人のクライマー」として包摂していることの証明といえる。

2. インタビューが浮き彫りにした「対等な関係」(質的研究：中道莉央准教授)中道先生は、詳細なインタビューを通じて数値では捉えきれない心の機微を分析した。「障害者としてではなく、一人のクライマーとして見てもらえた」「助けるつもりで参加したが、支えられていたのは私の方だった」といった声からは、現場で「役割の流動性」が起きていることが読み取れる。クライミングという共通の難題に向き合う中で、教える・教わるという立場が自然に入れ替わり、固定された支援－被支援の関係を越えた対等なパートナーシップが生まれている。このような相互的な経験の積み重ねによる深い共感こそが、多様性を尊重し合う社会をかたちづくる核となる。

3. 「経験」から「確かなエビデンス」へ本研究の意義は、本活動に「主観的な感想を超えた客観的な価値がある」と論理的に示そうとしている点にある。

科学的な裏付けを得ることで、本活動は教育や福祉、登山界全体の発展に寄与する有力な「手法」としての意義をより強固なものにしている。両先生においては、第27回日本野外教育学会にて「交流型クライミングの普及を目的としたイベントへの参加が参加者の心理的変容に及ぼす影響」、および第45回日本アダプティッド体育スポーツ学会にて「交流型クライミングイベントへの参加による参加者の意識変容」との題名で研究成果の発表をされ、現在論文での報告準備を進めている。(2026年1月現在)

## 第9章：海を越え、世代を繋ぐ——「交流」という普遍的価値への伝播

全国へと広がった交流型クライミングの種は、今や国境を越え、次世代へとその根を伸ばしている。

1. ある学会で出会った台湾大学教授との縁をきっかけに、2024年、日本で培った経験をアジアの国々へ届ける国際プロジェクトが動き出した。シンガポールの「Merdeka Monkey」や台湾の「Formosa Monkey」は、いずれもモンキーマジックが立ち上げから伴走し、定期開催を前提に定着した拠点である。

シンガポールの主要メディア(CNA)は、現地の参加者の「自分を憐れむのではなく、幸運だと感じる」という言葉と共に、この場が「コミュニ



初の国外の交流イベントがシンガポールの地で誕生



**「クライミングを通じて仲間になろう」がテーマのモンキッズに参加する子どもたち**

ティの絆を深め、社会の障壁を溶かす」ものであると大きく報じた。日本発の「交流型」が持つエネルギーは、国境を越えても変わることはない。

2. DDS と HKK：価値を繋ぐ共通言語交流を支えるのは、日本生まれの「HKK」と、その国際版「DDS (Direction, Distance, Shape)」である。手法を標準化する目的は、単に完登を支援することではない。この共通言語があれば、世界のどこであっても見える人と見えない人の距離が一瞬で縮まり、対等な仲間になれるからだ。

3. 「モンキッズ」：次世代が体現する「境界のない日常」2024年春から小・中学生対象の「モンキッズ」を開始した。障害児と地域の児童が共に参加するこの場では、子供たちは大人が教える前にHKKを駆使して対話を始める。彼らにとって多様性とは、教科書で学ぶ知識ではなく、クライミングを通じて肌で感じた「当たり前の日常」そのものなのである。

## 第10章：クライミングが拓く未来、および価値を繋ぐための挑戦

第8章の研究成果は、クライミングが単なる身体活動を超え、社会を豊かにする強固な「インフラ」になり得ることを示唆している。私たちは20周年

を機に、SDGsのさらに先、誰もが属性に縛られず個を響かせ合う未来の実現に向け、改めて「3つの目標」を柱に据えた。

<20周年の決意：私たちが掲げる3つの目標>

- ・「交流型クライミング」の最優先化：単なる普及に留まらず、障害の有無に関わらず「共に登り、共に笑う」交流そのものを活動の核に据える。
- ・「言語」を介したコミュニケーションと価値創造：視覚情報を言葉で共有するプロセスから、新しい社会の繋がり方を提示する。
- ・「国際的なネットワーキングの構築」：日本発のメソッドを世界へ発信し、グローバルなネットワークを確立する。



**20周年の節目に次の10年への決意表明を行った**

しかし、この未来を描く上で避けては通れない現実がある。モンキーマジックが取り組む「価値創造型」の活動は、心のバリアを溶かすという成果が可視化されにくく、構造的に社会的な支援を得にくい課題を抱えている。研究によって客観的な価値が証明されつつある今こそ、私たちはこの「価値」を社会の共有財産として存続させるための知恵や協働を必要としている。

<本稿をお読みいただいた皆様へのお願い>

私は、モンキーマジックの活動を通じて実感してきた「壁を越える力」、そして時には「壁を溶かす力」を信じています。その先に待っている、笑顔があふれる未来の社会を創るために、一人でも多くの方に一緒にいただけたら、これほど心強いことはありません。

個人でも、組織や企業という形でも構いません。あなたがこの活動に関わり、力を貸してくださることで、私たちの歩みはもっと力強く、加速していくと確信しています。私たちは次の10年、およびその先の未来も、皆さんと一緒に新しい社会の景色を見に行くために登り続けたいのです。あなたが関わってくださることで、私たちの夢は現実一步一步、確実に近づいていくことができるはずです。皆さんと共に、まだ見ぬ新しい景色を眺められる日を、心から楽しみにしています。

結びに——私にとってのクライミング

メディアの取材で、「小林さんにとってクライミングとは何ですか」と問われることがある。私の答えはいつも同じだ。「一番大事な友達です」と。

それは、いつも仲良くして元気をもらえるだけの関係ではない。時には、大喧嘩して顔も見たくない、しばらく距離を置きたいと思うこともある。しかし、楽しい時も、苦しい時も、常に傍らで私を支えてくれた。無我夢中になった若い時代も、光を失ってから、その本質的な魅力が変わることはなかった。だからこそ私は、自分の大切な「クライミング」という友達の素晴らしさを、一人でも多くの人に知ってもらいたい。その一心で、これまで活動が続けてこられたのだと思う。

「さあ、まだ見ぬ壁が待っている。」

20年という歩みは、まだ通過点に過ぎない。これからクライミングという「最高の友達」の手を借りて、誰もが自分らしく輝ける社会を目指し、私も一歩ずつ壁を登り続けていく。